

\* ICU に入学を希望する受験生の学習のために公開している資料です。  
ICU 公式の試験問題用紙ではありません。  
(This is NOT the official Exam.)

No.000001

受験番号					
------	--	--	--	--	--

学習能力考査

人 文 科 学

資料及び問題

指示

係りの指示があるまでは絶対に中を開けないこと

0. 頑張ってください。
1. この考査は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができたかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に 40 の問い(1-40)があります。
3. 考査時間は、「考査はじめ」の合図があってから正味 70 分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて 70 分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります答えが指示どおりでない、たとえそれが正解であっても無効になりますから、解答の仕方をよく理解してから始めてください。
5. 答えはすべて、この冊子といっしょに配られる解答用カードの定められたところに、指示どおりに鉛筆を用いて書きいれてください。一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを書いてください。
6. もしなにか書く必要があるときは、必ずこの冊子の余白を用い、解答用カードには絶対に書きいれないでください。この冊子以外の紙の使用は許されません。
7. 「考査やめ」の合図があつたらただちにやめて、この冊子と解答用カードとを係りが集め終わるまで待ってください。集める前に退場したり用紙をもちだすことは、絶対に許されません。
8. 指示について質問があるときは、係りに聞いてください。ただし資料と問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答用カードの定められたところに忘れずに書き入れること

## 久米邦武の西洋音楽体験とその意味

### はじめに

『特命全権大使米欧回覧実記』（以下、『回覧実記』）という、1878（明治11）年に出版された書物がある。この書物は、1871年末から73年秋にかけて明治政府によって派遣された岩倉使節団が欧米各国を歴訪した時の記録資料に基づいたもので、当時の日本人が見聞した欧米諸国の状況が、漢文書き下し文と銅版画入りで詳細に紹介され、様々な観点から論評されている。これを執筆、編纂したのは、江戸の終わり天保年間に生まれ、昭和の初めまで生きた歴史家、久米<sup>くみ</sup>邦武（1839-1931）である。久米は、大使随行員として使節団に加わり、帰国後の数年間をかけて、この書物の完成に努力したのであった。百科全書的内容をもつこの出版物に深く関わったことは、期せずして、久米にリベラル・アーツ的視点を与え、そのことは、その後の歴史家としての久米の広範な研究活動の基礎となったのである。

ここでは、その多岐にわたる記述内容のなかから、主に西洋音楽との出会いについて取り上げて論じてみたい。もちろん、他の事象、例えば、政治、経済、教育、自然等についても多くの興味深い観察がなされているが、敢えて、言葉によって印象を描写することが容易でない、音楽という対象、それも、明治初期の日本人があまり聴いたことのなかった種類の音楽に出会った時の記述を検証してみたい。というのも、自分の理解を超えた何かに対峙しなければならぬ時こそ、それまでに培った教養が、その未知の領域の理解に生きてくるかどうか問われるからであり、更には、自分の育った文化とは異なる文化に接触することによって、それまで気付かなかった自らの文化の新しい意味や可能性を発見することもあるからである。特に、音楽のように、言葉の表現を超えて人の心に直接に訴える力をもった対象を論ずる時であれば、そのことは、なおさら強く意識されるのではないかと思うのである。

### 1. 久米邦武の前半生

久米邦武は、1839（天保14）年、九州の佐賀城下に生まれた。父は藩主鍋島家に仕える武士で、役人として実利に明るく、机上の学問を嫌い、息子には書を読むだけでなく、算術など、実際的な訓練をすることを奨めたい。このことは、後に、邦武が歴史家として常に実証的な立場を重視し、古文書の研究に没頭したことと無関係ではない。実際、父の影響については、後に自らの史学思想の生い立ちを語った「泰東史談」のなかで述懐している。

さて、15歳で佐賀藩の藩校である弘道館に入ると、一級上の大隈八太郎（のちの重信）と知り合い、学友として親しい関係を築いた。このことは、後年、久米が帝国大学文科大学教授を依願退職してから、早稲田大学の教壇に立つことへの伏線になっている。24歳の時、藩命により、奨学生として江戸の昌平坂学問所への一年余りの遊学が認められる。翌年帰藩後、藩主鍋

鳥直大の父蘭叟公直正の近習となって、開明派であった主君の薫陶をうけ、29歳で弘道館の教授になった。

そして、廃藩置県後、官吏として県政に勤んでいた1871年、32歳の時に、人生の大きな転機が訪れる。明治新政府の右大臣岩倉具視の欧米使節団に随行することを突然に命じられ、年末には横浜から出港することになったのである。ここではある奇遇が働いていた。というのも、第一候補だった重野安繹（1827-1910）が辞退したのである。その結果、以前、岩倉の息子達が佐賀に遊学した時に、相手役としてたまたま世話をしたのが縁で、邦武に声がかかったのであった。重野は、当時既に名の知られた歴史学者で、後に太政官（内閣）修史局や帝国大学文科大学で久米の上司にもなる人物である。この時点での久米は、当時の知識人の素養としての漢学を十分に身に付け、実利に通じた能吏であったが、その後の岩倉使節団での経験、『回覧実記』の編纂、執筆を通して、さらに教養人としての資質を磨くことになる。

## 2. 岩倉使節団と『回覧実記』

その後の日本の歴史の上でも他に類を見ない一大政府事業となった岩倉使節団が、横浜から太平洋郵船会社（Pacific Mail Steam-Ship Co.）所属の外輪船アメリカ号（4,500トン余り）でサンフランシスコに向けて出帆したのは、1871年12月23日（陽暦）であった。（ちなみに、日本政府が陽暦を採用したのは、陰暦明治5年12月3日を、陽暦明治6（1873）年1月1日として読み替えて以来であるから、出帆の日は本来、陰暦明治4年11月12日と言わねばならないところだが、ここでは、混乱を避けるため、全て陽暦に統一する。）明治新政府は発足してまだ日が浅く、国内の各地で旧士族らの不満が募りつつあり、国外に対しても、まだ充分な国力を示すことは難しかった。そんな時期に、政府の主要メンバーが長期にわたって国外に滞在することは、政府の存立に大きなリスクをもたらす可能性がある。しかし、岩倉を中心とする首脳陣は、敢えて派遣を決定したのであった。

この時の使節団一行は、特命全権大使岩倉具視をはじめとする団員46名と、その従者18名、同行留学生43名であった。団員のなかには、副使として木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、山口尚芳がおり、久米は大使随行者として団員の一人であった。（この他、訪問先などで後から加わった団員は20名で、その中には、後の同志社大学の創立者で、当時アメリカ留学中だった新島襄がいる。）いかに重要なメンバーが含まれていたかが判る。

ところで、同行留学生のなかには、後に津田塾大学の創立者となる津田梅子（8歳）、東京音楽学校教授となる永井繁（9歳）、後の大山巖元帥夫人で、慈善事業家となる山川捨松（12歳）ら、5名の女子留学生が含まれていたことはよく知られている。この女子留学生派遣計画は、「これからは女子も社会的に相当な役割を演じるべき」という、時の北海道開拓使長官黒田清隆（薩摩藩出身）の建議によるもので、実際、費用は北海道開拓使が負担したらしい。

その趣旨は今でも高く評価されるべきだが、問題はその選考の方法で、全員が下級官吏の娘

であり、かつ、明治維新の政権交代における敗者の側（旧幕臣や旧幕府軍側の藩）の出身者が多かった。（例えば、山川は会津藩の出身で、戊辰戦争では新政府軍に抵抗して鶴ヶ城に籠城している。）この点について、田中彰は、「彼女たちは未知の世界への実験台に立つために選ばれた人身御供だった」と表現している。確かに、たとえ派遣の高邁な理想には賛同したとしても、実際に自分の娘にその役を担わせて、「危険な」外国に送り出すことは忍び難いという、薩摩や長州等、勝者の側の思惑がよく表れているのではなかろうか。

ともあれ、留学生以外の使節団の一行は、アメリカの後、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ（正確にはプロイセン）、ロシア、デンマーク、スウェーデン、イタリア、オーストリア、スイスの12カ国を歴訪し、地中海を東に進んで、1869年に竣工したばかりのスエズ運河を通り、インド洋、東南アジア、上海を経由して、1873年9月13日、横浜に帰帆した。それは正に世界一周旅行であり、この当時それが出来た日本人は極めて稀な存在であったに違いない。従って、その貴重な体験は、本国の日本人にとって、世界の現実と日本の置かれた状況を理解する上で、重要な情報源となった。

ところで、この使節団の公式の目的は大きく分けて三つあった。一つ目は、幕末以来の修好通商条約を結んでいる国々を表敬訪問すること、二つ目は、外国に領事裁判権を認め、また日本が関税権をもたないなどの不平等条約の改正予備交渉をすること、そして三つ目は、欧米各国の制度、文物を調査、研究することであった。第一の目的は自ずと達成されたが、期待されていた第二の目的は、早々とアメリカで挫折し、以後<sup>はかばか</sup>しい進展はなかった。そして、結果として最も重要になったのが第三の目的であり、その内容を整理、記述し、少なくとも10回の改訂、増補によって推敲を重ね、しかも「イラスト入り」にして、全5編（100巻）、本文2,110頁という体裁で、初版500部を1878年に公刊したのが、上記の『回覧実記』なのである。

もちろん、それ以外にも、「理事功程」という、司法省、文部省、大蔵省等に提出された各省の専門分野別の報告書や、「視察功程」という、議会への報告書もあるが、百科全書的な『回覧実記』は、洋行経験のない一般の日本人にとって、海外の様々な事情に関する指南書として、以後大きな意味をもつことになる。従って、その編著者であった久米の役割と責任は極めて大きかった。実際、『回覧実記』はその後増刷を重ね、初版を含めて最低3,500部、あるいはそれ以上が印刷されている。

久米は、回覧中に自らが実際に見聞きした事柄について、職務として詳細なメモをとり（正式な職分は「大使付属枢密記録等取調兼各国宗教視察」及び「使節紀行纂輯専務心得」）、帰国後、上記の『理事功程』など、他の資料も参照しつつ、自身の感想、意見も織り込んで、単なる報告書の域を越えた見聞記としてまとめた。それは、明治の日本人が、西洋という異文化に直接対峙した時の感動や驚きを含む読み物として、今の日本人にとっても大変興味深い。また、編纂にあたって、客観的事実の記述である「実録」の部分と、主観的評価の「論説」の部分を意識して区別したことは、久米の歴史家としての学術的感覚を反映している点で重要である。この『回覧実記』の英訳が2002年に出版され、また、現代語訳が2005年に出版される等（参考

文献参照)、岩倉使節団の活動内容と久米の記述に対する関心は、近年、国の内外でさらに高まっていると言えよう。19世紀半ばの世界情勢をつぶさに見聞した人物の生きた証言が、現在の日本人にとっても、また海外の研究者にとっても、大変新鮮で貴重な記録になっているのである。

ところで、一般論として、政府の主要な複数の人物が、2年近くも本国を留守にするというのは、異常ともいえる。交通、通信手段も今程発達していない頃に、内閣の大臣の半数が海外に長期滞在しているとすればなおさらであり、たとえ、そうした手段が飛躍的に整備された現在であっても、大いに問題を起こすことになるであろう。実際、大隈、西郷、板垣らの留守政府側が、事前の約定を守らずに次々に機構改革や新政策を実施に移し、また、洋行政府側も、アメリカ側から指摘のあった、条約調印のための天皇からの全権委任状を取りに、大久保、伊藤がワシントンから往復4ヶ月かけて急ぎトンボ返りしたが、結局、条約改正交渉に失敗するなど、確かに問題はあったが、この歴訪によって使節参加者が得た知識、経験は、はかり知れないものであったに違いない。

単に文字や他人の言葉によってのみ知っているのと、実物を自分の目と耳で体験しているのでは、理解の程度に雲泥の差が出てくる。これは、いつの時代にあっても不変の真理ではなからうか。何事も常に自分自身の目と耳で確かめ、他人の意見に惑わされることなく自らの理解に努めることは、学問の基本であり、人生の指針でもある。明治維新の指導者たちは、正に、その必要を痛感していたのである。これから、西洋の国々と伍して行くためには、相手を正確に知る必要があった。それ故に、困難は承知の上で、使節団の派遣を断行したのである。そして、大きな見地から見れば、結果として、派遣は成功であったと言えよう。

### 3. 西洋音楽体験の記述とその分析

使節団の主たる関心は、政治、経済、工業技術など、概して、実際的な知識の獲得であった。しかし、けっして多くはないものの、美術や音楽などの芸術への言及もされている。西洋文化についての知識や経験が充分でない使節団の人々は、ある種の直感で、その心髄を理解しようと努め、その国の芸術の重要性を理解しようとしたのである。事実、久米邦武自身も、日本の伝統音楽については、生活のなかで接する範囲内での一般的な知識はあっただろうが、特に専門的な音楽環境に生まれ育ったとは思えない。西洋音楽についての知識も経験も乏しかったこれらの日本人が、一体どのような心持ちで異国の音楽に耳を傾けたのであろうか。

一般に、音楽を聴いた時に受ける感覚や印象はきわめて主観的な要素が強く、また対象が具体的な事物でないため、たとえ同じ文化的背景をもった人間同士であっても、その感想や内容を的確な言葉に表すのが難しい。特に、書き手と読み手が互いに専門的知識を共有していない場合には、内容を相手に伝えることが余計に困難なこともあって、なかなか文字に拠る記録が残らない。それ故に、使節団の公式の記録としては、なおさら残しづらい対象であったと言え

る。また、残すべき対象であるという意識もさほど高くなかったかもしれない。しかし、もし残されているとすれば、それはむしろ、心の印象の強さが、却って率直に表現された結果である可能性が高いのではなかろうか。

さて、『回覧実記』の記録を見る限り、欧米の各国を歴訪するなかで使節団が経験した音楽の種類は、大別して、1) 軍楽隊の音楽、2) 学校教育の場における音楽、3) 舞踏会や晩餐会での音楽、4) 演奏会場での音楽、5) 教会での音楽、6) 諸民族の音楽、7) 劇場での音楽に分けることができる。以下、『回覧実記』の記述中に見られる、それらの実例をあげてみたい。(なお、引用には現代語訳を用いる。)ただ、1)の軍楽についてと、3)の舞踏会等の伴奏音楽については、幕末以来、日本に来訪した外国の軍艦や使節などによってもたらされ、既に日本にいる間に経験していた可能性が高く、使節団にとって格別珍しいということもなかっただろうから、ここでは取り上げない。

さて、2)の学校での音楽の例としては、サンフランシスコで、1872年1月23日に「朝10時からデンマン女学校を訪れた。[中略]この日は教師がピアノを弾き、女生徒たちは「野ばら」の歌の一節を斉唱した。」「唱歌は小学校の日課である。歌うことによって生徒達は神を敬い、人格を穏やかにすることができる。ピアノの伴奏でリズム感を養い、行進をきちんとさせ、舞踏をさせる。これは男女共通の教育である。これは中国の古代王朝において、音楽を司る官吏が世継ぎの王子の教育を担当したという故事によく似ていると思う。」「このあと、各地の学校を訪問するたびに唱歌を聞かされたが、毎度のことであるので、一々これを記録することはしない」とある。「野ばら」はシューベルト作曲のもので、これを女学生たちが歌う姿をみて、使節団の一行は、歌のもつ徳育上の効果を実感したに違いない。歌を上手く歌うことはもちろん重要だが、共に歌うことを通して養われる連帯感や、情操も大切である。その後の視察において、そうした習慣がアメリカ各地の学校に普及している事を知って、その度に報告する事はしなかったが、音楽を含む教育一般のもつ文明社会の基本としての重要性を、さらに認識していくのである。また、中国の故事に比較させるところは、当時の日本人の教養が、多くを中国の文献に拠っていたことを改めて思い起こさせる。

4)の演奏会場での音楽の例としては、1872年6月18-19日にボストンで出席した、世界平和を記念する音楽会、「太平楽会 (World Peace Jubilee)」の様子についての記述が興味深い。この演奏会については、長く詳細に報告しており、『回覧実記』全体でも、これ程念入りに描写された音楽の例は他にない。恐らく、その規模の大きさが特に印象的であったに違いない。記述の一部を紹介しよう。

「午後2時から「太平楽会」に赴いた。これは多くの人々が集まって世界の平和を祝おうというので、今度行われた大きな集会である。」「海岸一体の土地を使用して大コロセウム (ホール) を造った。その幅は約120メートル、奥行きはほとんどその倍である。[中略]正面に壇をしつらえて演奏場所としている。各州から1,500人の演奏家を集め、歌の上手な男女1万6,000人を集めた。[中略]ホール内は5万人を収容してもまだゆとりがある。」演奏会場が如何に巨大

なものであったかが判る。これは、19世紀半ば頃からイギリス、アメリカを中心に流行した音楽会の形態で、大規模な企画を互いに競い合っていた。

さて、「午後3時、演奏が始まった。大楽団が奏でる曲の響きは、行く雲も止めるように暁々<sup>りょうりょう</sup>としている。万余の合唱団が一斉に歌うとその美しさは白い雪を舞わせるかのようである。次に歌姫が盛装して登場すると、金や宝石のアクセサリーが燦然と輝き、聴衆に向かって一礼すると、満員の聴衆が拍手してその名を叫んで歓迎した。やがて音楽が始まって歌い出すと、その声は玲瓏<sup>れいろう</sup>として美しい。細い音の部分は切々たる趣を持ち、低音部は力強く、曲調が速やかになるとまるで鶴の鳴き声が空をわたるようであり、滑らかに歌うときはまるで鶯が花から花に飛び移りながら囀るかのようである。珠玉が盤を転がるようでもあり、金や宝石が響き合うようでもある。音程の高い部分は金の琴の音かと思われ、その余韻はゆらゆらと糸のようでありながら絶えることなく、一転して玉を振るような声となる。その様子は鳳凰が威儀を正しているかのようである。」ここで特徴的なのは、「まるで… のよう」という比喩の表現であろう。これは音楽の印象を言葉で表現しようとする時にしばしば起ることで、特に、専門的語彙が使えない場合に多い。この場合、久米の教養の基礎にある漢詩の表現を使って描写しており、唐の詩人白居易撰の詩編「琵琶行」や儒教の経典「孟子」から表現を借りている。

続けて、「発声の上は、まるでこの女性の喉に楽器が仕掛けられているのかと疑うほどである。[中略] 西洋の歌というのは、人の声をひとつの楽器音と考える。他の楽器演奏に和して歌い、ハーモニーを作ることがその技術<sup>しゅぎ</sup>の真諦<sup>しんたい</sup>である。訓練を経ないで自然な発声で歌うのは拙劣な歌だと批評される」とある。これは音楽の専門的立場からも重要な指摘で、そうした知識がまだ十分でなかったこの当時、既に、西洋の声乐の書法が多分に器乐的であること、そして西洋のベルカント唱法と日本の伝統音楽の発声に大きな違いがあることに気付いているのは正に慧眼である。

次の日に「2時からまた「太平楽会」に行った。[中略] だいたい昨日と同じような感じであった。西洋の音楽をわが国の人が聞くと、どの曲も同じように聞こえるし、どの国の音楽も似ていると感じるのだが、実は国民性が異なるのと同じように各国の音楽も違うのである。音楽の造詣深い者は、批評もできるのである。季札（きさつ、原文では季孔となっているが誤り。季札は春秋時代、呉の人）が、15カ国のそれぞれのお国ぶりの音楽を聞き分けたというのも、嘘ではない。」これもまた、中国の故事に依拠した判断をしている。ある音楽をより深く理解するには、ある程度の知識が前提になることを指摘しており、また各々の文化には各々の音楽が存在するという認識は大変重要である。

さて、5)の教会での音楽の例としては、リヴァプールでオルガン演奏を聴く機会があった。1872年10月3日「午前10時50分、ホテル前のセント・ジョージ教会に行った。ホテルから教会の前まで警察官が道を警護し、われわれ一行のほか市内の男女100余人と一緒に教会に入り、扉を閉ざして音楽を聴いた。この教会は石造で建物も天井もたいへん高く、明るい。まわりの壁や柱にはみな精密な彫刻が施され、市内でも屈指の大建築である。正面に大きな楽器が設置

されており、三方に回廊がある。真ん中のホールをあわせると1,000人入れてもゆとりがある。この日は楽器（パイプ・オルガン）のストップを押さえつつ2曲が演奏されたが、一人の演奏家の演奏なのに殷々たる大音響を発し、その音は会堂いっぱいにあふれた。」当地の新聞*Daily Courier*の10月4日版によると、この時演奏された2曲は、一つがリストの「行進曲」、もう一つがメンデルスゾーンの有名な「結婚行進曲」で、オルガンを演奏したのは、当時のイギリス・オルガン界の巨匠の一人、William Thomas Best (1826-1897)であった。残念ながら、それ以上の記述はないが、使節団の一行が、19世紀オルガン音楽に特徴的な音量の大きさを体験したのは確かである。礼拝のための音楽ではないものの、教会の響きと雰囲気を実感したに違いない。礼拝については、エディンバラに滞在中、10月20日の朝11時から、セント・ジョーンズ教会の礼拝に参加した記述があるから、その時に経験しているはずであるが、それ以上の詳細は判らない。

6) の民族音楽の例としては、スコットランドでバグパイプの演奏を聴いた時の印象が鮮やかである。1872年10月19日に、岩倉と一部の団員のみがハイランド地方を遊覧した。「われわれの馬車の前に一台の馬車がバグパイプというスコットランドの楽器を演奏しながら先行する。バグパイプというのは、二本の笛を使用し、ラッパのように構えて吹く楽器である。その音は高く朗らかで、また清雅の趣もある。湖と分かれて道がまた黄葉の林に入ると、木漏れ日がちらちらし、高らかな楽の音が馬車を導きながら林間を走って行く。うっとりとして仙境を旅しているようだ。」

この、湖沼地帯を馬車で巡って書いた紀行文は、これまた漢詩を採り入れた洗練された表現で、音の美の世界を巧みに描いている。恐らく、その光景は、久米の脳裏に音と共に強く焼き付いたに違いない。特に後半の部分「一路又黄葉ノ林ニ入り、日光陰映シ」と続く表現からは、美しい風景と音の照応が伝わってくる。ここでは詳細な議論をしないが、久米の漢文の詩的美しさを指摘する研究者もおり、漢籍の深い素養を感じさせるものである。詩的表現に長けている点では、同じく西洋文明について深く論述した福澤諭吉よりも優れていると、その研究者は述べている。従って、音楽について文章で表現するにあたっては、福澤よりも久米の方が適材であったと言えるのかもしれない。そうした感覚的体験については、久米の詩的表現能力が十分に活かされていると言える。

さて、記述の詩的内容から判断すると、どうも、他のどの音楽よりも、この音楽が、書き手の心に素直に訴えたのではないかという気がする。ボストンでの表現がどちらかと言えば「よそ行き」な描写であったのに対して、ここでは、心の内面の表現になっている。何の曲であったのかは記述からは全く不明なので、安易な断定はできないが、もし、スコットランド民謡であれば、五音音階による旋律であった可能性が高い。この音階は日本の伝統音楽の音階の一つに類似していることもあり、その点で、耳馴れており、理解が容易であったと言えるかもしれない。五音音階は、唱歌等を通して、明治以降の日本人の耳にも馴染んでおり、いわゆる「四七抜き音階」も、その類である。



ちなみに、バグパイプのことを、原文では「パーフ・ハーフ」と書いており、多分、発音を聞き間違えているようだ。これは当時の日本語の文献ではしばしばあることで、よく言われる、日本人の外国語聞き取り能力の問題を示すような話ではある。しかし、一般論として、明治期以降の外来語のカタカナ表記は、われわれ現代に生きる者にとっても厄介な問題であり、「ジレンマ」なのか「ディレンマ」なのか、「ビジュアル」なのか「ヴィジュアル」なのか、迷う例は多い。

最後に、7)の劇場での音楽としては、ベルリンでのオペラ鑑賞の例がある。久米は、1873年3月11日「夜、王立劇場に行った」という実録に続いて、「[それは]オペラという。いろいろな芝居の中で最も高級なものである。ちょうどわが国の能楽のようなものである」という論説を加えている。(原文では「オペラ」を「オヘラ」と表記しており、これも聞き違えた可能性がある。また、当時は「能楽」のことは「猿楽」と呼んでいた。)

この時の使節団の活動は、ベルリンの幾つかの新聞によって報告されており、また、劇場のオペラの上演案内も記録されているから、そこから推察すると、彼等がみたオペラとは、ヴァーグナーの【ローエングリン】であった可能性が高い。残念ながら、音楽の内容についてのそれ以上の記述はないが、もしあれば、ヴァーグナーのオペラについての当時の日本人の印象を知る上で、さらに興味深かっただろう。しかし、ここで久米が、オペラは能に似ていると言っているのは重要である。というのも、使節団が日本に戻ってから数年後に、岩倉と久米が協力して、能を国楽として奨励し、復興させる努力をしたことに関係するからである。

## おわりに

1911(明治44)年7月の「能楽」に掲載された「能楽の過去と将来」という論文のなかで、「能楽に興味を起こした理由」について、久米は後に次のように述べている。「丁度明治4年私が岩倉大使に従つて欧州に行つた時、西洋の王宮には芝居の舞台があり、[中略]実はオペラの舞台で、日本で云ふ能舞台の如きものであつた。[中略]実は私は外国で、此の礼服用の芝居を日本の能楽堂と同じであると観じた時までは、能なるものを余り興味あるものと思つて居なかつた。それのみか、却<sup>かへ</sup>而<sup>て</sup>天保の末葉などには能楽に耽溺する武士を、柔弱軽佻と侮つた程であるから、寧ろ多少の反感を持つて居つた。然るに、欧州の宮殿にある、その壮麗なるオペラ堂を見るに至つて、痛切に国民娯楽の必要を感じ、而してかかる精神上の慰藉から種々な結果を来たす娯楽には、一時的流行のもの、今日あつて明日なきもの、又は外来の浮ついたものでは所詮立派なものは出来ぬ、どうしても、シツカリと国民性の奥に根を持つて居るもの、即ち、日本固有の歌舞音曲でなければならぬ。若し此選択を過つたなら、国民的娯楽の欠乏から、日本は非常な不幸に陥らねばならぬ、と、其処で能楽の芸術的価値を思ふに至つた。」(必要最小限、現代表記に改めた。)これは、能復興の意味を理解する上で、とても重要な言葉である。即ち、異文化に触れることで初めて、己の文化の価値に気がついたということに他ならない。

1873年9月に帰国して以来数年間、岩倉ら使節団の多くのメンバーは、政治的な後始末に追われた。しかし、日本固有の芸術を奨励することの重要性について、岩倉と久米の考えは一致しており、久米は、実証的研究価値のある題材として、能に関する文献学的研究を進めた。また、岩倉は、1876年4月に私邸で能を催し、明治天皇を招待して興味を喚起すると共に、武家の武楽であったゆえに徳川幕府の崩壊以来生きる場所を失っていた能役者達に、経済的な援助を始めたのである。また、1879年7月には、前アメリカ大統領グラントが来日し、岩倉邸に招かれて能を鑑賞した際、能を国の芸術として振興すべきとの薦めもあった。こうして、一旦廃れかけていた能楽の伝統が、世界に誇りうる日本の伝統芸術として再生し、現在に至っているのである。

このように、『回覧実記』に見られる音楽に関する記述内容を読み解くと、音楽の専門家ではない久米が、西洋の様々な未知の事象を理解しようとして、自分がそれまで培ってきた教養を駆使しつつ、対象となるものの実体に懸命に迫る努力をしたことが判る。そして、決して自らの好みや偏見にとらわれることなく、そこからまた何か新しい価値の発見へと結び付ける見識を示している事も判るのである。岩倉使節団に参加し、『回覧実記』を完成する過程を通して、期せずして、久米はリベラル・アーツの実践者になったのである。

## 参考文献（出版年順）

### 一次資料

『久米博士九十年回顧録』、早稲田大学出版部、1934年；復刻版、宗高書房、1985年。

久米邦武編『特命全権大使米欧回覧実記』、復刻版、宗高書房、1975年。

久米邦武編、田中 彰校註『特命全権大使米欧回覧実記』、岩波書店、1977年。

*The Iwakura Embassy 1871-73: A True Account of the Ambassador Extraordinary & Plenipotentiary's Journey of Observation Through the United States of America and Europe. Compiled by Kume Kunitake. The Japan Documents, 2002.*

水澤 周編訳注『現代語訳、特命全権大使米欧回覧実記』、慶応義塾大学出版会、2005年。

### 二次資料

大久保利謙編『岩倉使節の研究』、宗高書房、1976年。

田中 彰『岩倉使節団』、講談社現代新書、1977年。

中村洪介『西洋の音、日本の耳：近代日本文学と西洋音楽』、春秋社、1987年。

大久保利謙編『久米邦武の研究』、久米邦武歴史著作集別巻、吉川弘文館、1991年。

田中 彰、高田誠二編著『「米欧回覧実記」の学際的研究』、北海道大学図書刊行会、1993年。

西川長夫、松宮秀治編『「米欧回覧実記」を読む：1870年代の世界と日本』、法律文化社、1995年。

久米美術館編『＜新訂版＞歴史家久米邦武』、1997年。

『異文化交流と近代化：京都国際セミナー1996』、大空社、1998年。

イアン・ニッシュ編、麻田貞雄他訳『欧米から見た岩倉使節団』、ミネルヴァ書房、2002年。

田中 彰『岩倉使節団の歴史的研究』、岩波書店、2002年。

中村洪介『近代日本洋楽史序説』、林淑姫監修、東京書籍、2003年。

芳賀 徹編『岩倉使節団の比較文化史的研究』、思文閣出版、2003年。

米欧回覧の会編『岩倉使節団の再発見』、思文閣出版、2003年。

---

次の問題（1－40）には、それぞれ a, b, c, d の答えが与えてあります。各問題につき a, b, c, d のなかから、最も適切と思う答えを一つだけ選び、解答用カードの相当欄にあたる a, b, c, d のいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

例 (41)      C 〇 D   C 〇 D      C 〇 D

---

1. 久米邦武の学問の実証的性格は、どのような影響を受けて形作られたか。
  - a. 父親が古文書学の研究を奨めたからである。
  - b. 父親が和算術の訓練を強要したからである。
  - c. 父親が実利的な訓練を奨励したからである。
  - d. 父親が無意味な読書を禁止したからである。
  
2. 久米邦武は歴史家としての学問的な立場を重視したとされている。このような立場は【回覧実記】の中のどのような点に表れているか。
  - a. 久米自身の感想、意見も織り込んで、単なる報告書の域を越えた見聞録となっている。
  - b. 音楽の印象を叙述するのみではなく、演奏の場所や、聴衆の人数などを記録している。
  - c. 政治、経済、工業技術などばかりでなく、絵画や音楽など芸術に関する記述も含まれている。
  - d. 客観的事実の記述である「実録」の部分と主観的評価の「論説」の部分が区別されている。
  
3. シューベルト作曲の「野ばら」の歌詞の作者は次のうちどれか。
  - a. ハイネ
  - b. ヴェルナー
  - c. シラー
  - d. ゲーテ
  
4. 比喩には、直喩と隠喩の区別がある。ボストンでの「太平楽会」の描写において用いられている比喩について、次のうち正しいのはどれか。
  - a. 直喩である。
  - b. 隠喩である。
  - c. どちらとも言えない。
  - d. 両者が混在している。

5. 筆者の観点から、異文化に触れることの意義を述べたものとして最もふさわしいのは次のうちどれか。
- 自分の文化を再認識するきっかけになる。
  - 自分の文化の欠点を認識するきっかけになる。
  - 他者の文化との類似性を認識するきっかけとなる。
  - 他者の文化を認識しそれを模倣するきっかけとなる。
6. 岩倉と久米は能について一致した意見を持っていた。そのことの意味として最も適切なものは次のうちどれか。
- 能を娯楽として振興すること。
  - 能を国楽として振興すること。
  - 能を実証的研究の対象とすること。
  - 能の式楽としての伝統を認識すること。
7. 前アメリカ大統領グラントの来日の意義に関する記述として最も適切なものは次のうちどれか。
- 能がアメリカ大陸に普及するきっかけとなったこと。
  - アメリカの文化的圧力を意識するきっかけとなったこと。
  - かつてのアメリカ訪問の外交的意味が再確認されたこと。
  - 能を国楽として奨励することに対する賛同が表明されたこと。
8. 明治の初めに能楽が廃れた理由として最も重要なものは次のうちどれか。
- 柔弱軽佻と思われていたから。
  - 武士階級が没落したから。
  - 明治天皇が嫌っていたから。
  - 鎖国が終わって外来音楽が流入したから。
9. 使節団がリヴァプールの教会で体験した音楽は次のうちのどれか。
- 民族音楽であった。
  - 礼拝音楽であった。
  - 劇的音楽であった。
  - オルガン音楽であった。

10. バグパイプの音楽が久米の耳に馴染んで聞こえたと思われる理由は次のうちどれか。
- a. スコットランド民謡だったから。
  - b. 風景と一体化していたから。
  - c. 五音音階の音楽だった可能性があるから。
  - d. 日本の伝統音楽を模倣していたから。
11. 『回覧実記』では、季札の故事との関連で「音楽の造詣深い者は、批評もできるのである」とされている。ここで言われている、音楽を批評することができる基盤の説明として、最もふさわしいのは次のうちどれか。
- a. 西洋のベルカント唱法と伝統的な日本の発声法を心得ており、様々な国の声楽の違いを聞き分けることができる。
  - b. 様々な国民の音楽の特徴を把握し、外国の音楽を聞く場合でも、それぞれの音楽の特徴を識別することができる。
  - c. 西洋の声楽の書法が器楽的であることを知り、楽器の音と人間の歌声がハーモニーを作り出すことを理解している。
  - d. 音楽の描写に詩的な比喩表現を用い、曲調の変化を多彩な比喩によって正確に反映する描写をすることができる。
12. 本資料における「人身御供」の内容として最も適切なのは次のうちどれか。
- a. 未知の世界に無防備のまま赴かされること。
  - b. 目的達成のために身を犠牲に捧げること。
  - c. 高邁な理想のために身近なものが見棄てられること。
  - d. 権力者への抵抗に敗れて危険な任務を与えられること。
13. 昌平坂学問所の説明として正しいのは次のうちどれか。
- a. 緒方洪庵が開設した。広く洋学が講じられ、橋本左内、福澤諭吉などを輩出した。
  - b. 徳川光圀が設立した。朱舜水を招いて学者を育成し、『大日本史』の編纂が行われた。
  - c. 林羅山が作った学寮を前身とする。羅山の子孫によって主催され、朱子学が講じられた。
  - d. 横井小楠の流れをくむ肥後実学派の拠点で、自然科学・地理・歴史などが講じられた。

14. 岩倉使節団は、どのような点で、その後の日本の歴史の上で他に類を見ない一大政府事業であったのか、次のうち最もふさわしいのはどれか。
- 欧米各国に加え、インド洋沿岸および東南アジアの諸国を表敬訪問し、条約締結交渉を行い、綿密な調査を実施したこと。
  - 「理事功程」、「視察功程」という政府各省および議会への報告書を補完するために「回覧実記」編纂を目的としたこと。
  - 通商条約相手国の訪問と条約改正に加え、各国の制度、文物の調査も目的とし、政府の要人を二年近く外国へ派遣したこと。
  - 団員46名に従者18名、留学生43名を加えた大規模な使節団が組織され、その規模に匹敵する大きな成功をおさめたこと。
15. 岩倉使節団が出発したとき、旧士族らの不満が募りつつあったとされている。この不満の表出とみなしえないのはどれか。
- 萩の乱
  - 征韓論
  - 版籍奉還
  - 西南戦争
16. 久米邦武の能に対する態度の説明としてあてはまらないのはどれか。
- 能は国民性に根を張った娯楽として尊重されるべきだと考えた。
  - オペラと能楽の共通性に気づき、能に興味を抱くようになった。
  - 柔弱な者に好まれる芸術と考えて、能を軽蔑していた時期があった。
  - 文献学的研究を通じて能楽の重要性を発見し、愛好するようになった。
17. 本資料の題に「久米邦武の西洋音楽体験とその意味」とある。「その意味」によって筆者が言おうとしていることを最も適切に述べているのは次のうちどれか。
- 明治時代の日本人が異質な西洋音楽と出会った折に抱いた感動や驚きの率直な記録が重要であるということである。
  - 西洋の音楽の多様性に学ぶ過程で、自国の伝統文化を反省し、能楽の再興にとって重要なきっかけとなった点である。
  - 西洋の国々の実情を正確に知ることの一つとして、音楽が教育の上で果たす重要な役割を見抜いている点が核心的なことである。
  - 十分な知識を持たない状態で、ある種の直感によって西洋文化の心髄を理解したことに、現代へのメッセージを読み取れるということである。

18. 久米が岩倉使節団の一員となるにいたった経緯に関する記述として最も適切といえるのは次のうちどれか。
- a. 久米は佐賀で官僚として働いていたが、その名前と存在は岩倉の周辺ではかなり知られていた。
  - b. 学問上の先輩であり上司でもあった重野安繹が使節団に加わることを断ったために、第二候補だった久米の順番になった。
  - c. 郷里で開明派の藩主に仕える以前、江戸の昌平坂学問所に遊学したが、その折に培った人脈が大切な意味を持った。
  - d. 藩校での上級生大隈八太郎との学問を通じた交友関係がもたらした縁が重要な役目を果たしている。
19. 久米の論述に関する次の文章のうちで間違っているのはどれか。
- a. ベルリンでのオペラ鑑賞の記述では、もともとは「オヘラ」と書かれていた。
  - b. ベルリンでのオペラ鑑賞の記述では、能楽は「猿楽」と書かれていた可能性が高い。
  - c. スコットランドを代表する楽器は、「パーフ・ハーフ」とであると書かれていた。
  - d. スコットランドの「パーフ・ハーフ」は、ラッパを2本使う楽器であると書かれていた。
20. 久米がベルカント唱法と日本の伝統的発声法の間の大きな違いに気付いたことは、本資料の論旨と重要なつながりを持っている。そのことに関する最も適切な理解は次のうちどれか。
- a. 久米が実体験を通じてある程度の音楽の知識を習得したことを示している。
  - b. 季札の故事を思い出すなど、久米の漢学の素養が生かされていることを示している。
  - c. 外国の文物を正確に知るといふ使節団の目的に久米が忠実であったことを示している。
  - d. 異文化との直接的対峙を通して、久米が自分の目と耳でその違いを認識したことを示している。
21. 久米が期せずしてリベラル・アーツの実践者となったと言われているが、その事例として必ずしも適切だと言えないのはどれか。
- a. 教会でのオルガンの音量の大きさや、教会堂の壮大な空間を感じ取ったこと。
  - b. 王立劇場でのオペラの壮大な演奏を体験して、自国の芸能との類似を想起したこと。
  - c. 学校での唱歌の練習が若者の徳育に重要な役割を果たしている点を見抜いたこと。
  - d. バグパイプの音楽の理解において、中国古典の詩的な言語表現が役立ったこと。



22. 使節団に加わるまでの久米邦武に関する記述として正しいのは次のうちどれか。
- a. 開明派の君主の影響を受け、学問一筋の道を歩んでいた。
  - b. 岩倉使節団の団員に選ばれるという期待をもっていなかった。
  - c. 岩倉使節団に加わって渡欧する以前は、教養人であったとはいいがたい。
  - d. 実的な事務能力を備えた能吏であり、学問には余り熱意を持っていなかった。
23. 本資料における異文化体験の論旨に最もふさわしい記述は次のうちどれか。
- a. バグパイプで演奏された民族音楽が耳に馴染みがあることから、スコットランド民謡の音階と日本の伝統的音階との類似性を発見したこと。
  - b. 日本ですでに読んでいた『理事功程』や『視察功程』で得た知識と、実際に欧米各国で体験した異文化の印象が質的に違っていると認識したこと。
  - c. 独唱者の歌唱法について、喉に楽器がついているかのように感じ、このことを一般的に西洋音楽における発声法の特徴と結びつけたこと。
  - d. アメリカの音楽教育に見いだされる人格陶冶の効果が、すでに古代中国でも認識されていたことから、古代中国文明の現代性に気づいたこと。
24. 筆者は岩倉使節団の派遣に関してはいくつかの問題点があったと考えている。その問題点にあてはまらないのはどれか。
- a. 全権委任状を携行せず、途中で取りに戻ったこと。
  - b. 交通手段として遅い船を使わざるをえなかったこと。
  - c. 政府の主要人物が二年近くも本国を留守にしたこと。
  - d. 留守政府側が、約束を違えて新政策を実行したこと。
25. 岩倉使節団は学校での音楽教育の視察を通して、歌うことのもつ徳育上の効果を実感したとされる。その効果の例として最も適当なのは次のうちどれか。
- a. 演奏技術を高め、達成感を体験させること。
  - b. 敬神の念を育て、人格を穏やかにすること。
  - c. 伝統的音楽に親しませ、愛国心を育てること。
  - d. リズム感を養い、行進をきちんとさせること。

26. 本資料における「孟子」への言及について、最もふさわしい説明と思われるのは次のうちどれか。
- a. 久米邦武が音楽の描写をする際に用いた比喻表現が採られた典拠となっている。
  - b. 歴史学者である久米邦武が古代中国史研究の資料とした文献の例となっている。
  - c. 漢詩が流麗な表現の典拠となったのに対して、重厚な倫理思想の典拠となっている。
  - d. 昌平坂学問所で学んだ久米邦武が批判の対象とした儒教の經典の例となっている。
27. 「回覧実記」中のバグパイプに関する叙述は「心の内面の表現になっている」とされている。このことを最も端的に表しているのは次のうちどれか。
- a. 「高く朗らかで、また清雅の趣もある」
  - b. 「高らかな楽の音が馬車を導きながら」
  - c. 「うっとりとして仙境を旅しているようだ」
  - d. 「湖と分かれて道がまた黄葉の林に入る」
28. 「雲泥の差」と意味において最も近いのは次のうちどれか。
- a. 猫に小判
  - b. 月とすっぽん
  - c. 馬の耳に念仏
  - d. 破れ鍋に綴じ蓋
29. 「殷々たる」の意味として最も適切と思われるのは次のうちどれか。
- a. 多彩な輝きを持った調和した音のさま
  - b. 雷や大砲の音のように大きく響き渡る音のさま
  - c. 余韻を秘めて巨大な空間に伝わる明るい音のさま
  - d. ストップの効果で音量を増大された圧倒的な音のさま
30. 筆者の考えでは、久米は期せずしてリベラル・アーツを実践したとされているが、その意味と合致しないのはどれか。
- a. 歴史的な実証性を重んじて、事実をできる限り厳密に記録したことである。
  - b. 古典、特に漢籍の深い知識が異質な文化の理解に役立てられていることである。
  - c. 自己の体験を注意深く、自分の目で見、耳で聞いて理解しようとしたことである。
  - d. 異質な文化との違いに注意するだけでなく、自らの文化への関心を深めたことである。

31. 本資料における筆者のカタカナ表記の仕方に従うと、適切なのは次のうちどれか。
- a. ジレンマとビジュアルとする。
  - b. デイレンマとビジュアルとする。
  - c. ジレンマとヴィジュアルとする。
  - d. デイレンマとヴィジュアルとする。
32. 軍楽隊、舞踏会の音楽の例が本資料において割愛されている理由としてふさわしいのは次のうちどれか。
- a. 日本国内で既に体験済みであったと思われるから。
  - b. 外国の脅威の象徴として拒否感が働いたから。
  - c. 日本国内では関心もたれていなかったから。
  - d. 外国ではいつも当たり前だったと思われるから。
33. 西洋の声楽の書法が器乐的であることに関する久米の見解の説明として最も適切なのは次のうちどれか。
- a. 西洋音楽の機能性を評価している。
  - b. 西洋音楽の技巧の難しさを評価している。
  - c. 西洋の声楽が漢語によって適確に描写できると考えている。
  - d. 西洋の声楽は他の楽器とハーモニーを形成すると考えている。
34. 岩倉使節団の目的の一つは不平等条約の改正予備交渉であったとされる。このような不平等条約の一つである日米修好通商条約についての記述として最もふさわしいのは次のうちどれか。
- a. 日本国内でのアメリカ人による犯罪についてアメリカ総領事が裁判権を持ち、アメリカからの輸入品に日本側が関税を課すことができなかった。
  - b. アメリカ総領事は、いかなる場合でも日本の裁判所で裁判を受けることはなく、アメリカからの輸入品に日本側が関税を課すことができなかった。
  - c. 日本国内でのアメリカ人による犯罪についてアメリカ総領事が裁判権を持ち、アメリカからの輸入品に対する関税の比率を日本側が決めることができなかった。
  - d. アメリカ総領事は、いかなる場合でも日本の裁判所で裁判を受けることがなく、アメリカからの輸入品に対する関税の比率を日本側が決めることができなかった。

35. 「回覧実記」の内容のうち、音楽についての記述が本資料中で取り上げられた理由として最も適切なのは次のうちどれか。
- a. 「回覧実記」以外の公文書には音楽に関する記録が存在していないから。
  - b. 「回覧実記」で取り上げるはずの政治や教育面で見べき成果が挙げられていないから。
  - c. 音楽は言語化するのが困難な文化であるから、それについての記述は興味深いため。
  - d. 異文化と出会い、それを正しく認識することが本論の重要なテーマだから。
36. 次の人物のうち、武士階級に属していなかったのは誰か。
- a. 伊藤博文
  - b. 木戸孝允
  - c. 岩倉具視
  - d. 大久保利通
37. 本資料で言及される人物のうち、後に伝統ある大学の創立者となった者でないのは誰か。
- a. 新島襄
  - b. 黒田清隆
  - c. 津田梅子
  - d. 大隈重信
38. 岩倉使節団に関して述べられた次の文章のうち最も適切だと言えるのは次のうちどれか。
- a. この使節団は修好通商条約の締結国を表敬訪問するという目的の点で十分な成果を上げることができなかった。
  - b. この使節団の第一の目的であった修好通商条約の相手国との間には、不平等条約の問題は存在していなかった。
  - c. 欧米各国の制度、文物を調査、研究することが結果的にこの使節団にとっての最も重要な目的となった。
  - d. この使節団は様々な困難に遭遇し、全体としては成功ではなかったというべきである。

39. 岩倉使節団に女子留学生が含まれていたことについての筆者の見解として最もふさわしいのは次のうちどれか。
- a. 女子留学生派遣の建前は開明的であるが、その人選について政府が明確な責任を持っていなかったことがうかがわれる。
  - b. 女子留学生派遣は高邁な理想に基づくものであるが、実際に女子留学生たちがしばしば危険に遭遇したことが大きな難点である。
  - c. 黒田清隆による建議は評価されるべきであるが、女子留学生たちの後の活動を見る限り、ふさわしい人物が選ばれたとは言えない。
  - d. 女性の活躍を期待したことは評価できるが、現実には将来政府への貢献が全く期待できない者たちが主に選ばれたことは問題である。
40. 音楽の内容や印象を言語化することの困難について、本資料の趣旨に最もふさわしいのは次のうちどれか。
- a. それ以前に培った教養が真実なものであれば、専門的知識を前提としなくても、音楽について言葉で表現することは可能である。
  - b. 言葉の表現を越えて直接心に訴える音楽は、同じ文化的背景を持った人間の間でしか言葉に表すことはできない。
  - c. 音楽の内容は主観的であり、異なった文化圏の音楽を表現することは、専門家でなければ不可能である。
  - d. はじめて出会う音楽を言葉によって描写する困難さは、明治初期の日本人に特徴的であった。